

明善同窓会関東支部 会報

発行：明善同窓会関東支部
会報発行委員会

事務局：世田谷区上馬 1-13-3

電話：03-3421-6071



今の明善校と生徒達

第二十一代 校長 石井利男



明善同窓会関東支部の皆様におかれましては、益々ご健勝にてご活躍のことと拝察いたします。また、平素から母校に對しまして物心両面からのご支援を賜り、心から感謝申し上げます。

本校は昨年度、同窓会や保護者会のご支援のもと、創立130周年記念式典を盛大に開催し、先輩方が嘗々と築いてこられた「克己・盡力・楽天」の校訓や校名・校歌等に代表される明善の伝統を現在の生徒の状況や生徒達が醸し出す学校文化を通して示し、関係者の皆様から改めて高い評価をいただいたところであります。着任一年目に巡り逢った大きな事業でありましたが、滞りなく一定の成果を収めて終えることができ、改めて皆様方のお力添えに感謝申し上げます。

また、昨年度は二年生の修学旅行の実施に際し、プログラムの一つの柱である東京の班別研修について関東支部の皆様にご協力をお願いいたしましたところ、それぞれご多忙のところ、後輩の現役生のために心温まるお世話をいただき、深く感謝申し上げます。お陰様で、もう一つの柱であります、「奥の細道を辿る旅」と併せて、生徒達は充実した修学旅行を体験することができたようです。本年度は、昨年度の経験を生かし、先輩諸氏のご指摘やご助言を参考にして、更に充実した東京研修(前半は、高野山や奈良・京都を巡ります)にしたいと考えていますので、引き続きご協力の程よろしくお願い申し上げます。

本年度学校は、140周年に向け新たな歩みを踏み出したわけですが、今後10年間の発展の確かな足がかりの一年となるよう、更に充実した教育活動を展開してまいりたいと考えています。平成の時代になってからの20年間に、理科コースの設置(学区：筑後全域)、食物科の開講、総合文教科コースの設置(学区：筑後全域)、少子化による学級人数・学級減、学校完全週二日制への移行とその対応等、制度上の大きな変遷や生徒を取り巻く社会状況の変化がありましたが、生徒達については、不易とも言える明善の伝統精神をしっかりと受け継ぎ、勉学に、部活動に、また、学校行事にと、充実した日々を送っており、自由闊達な校風は以前と変わっていないように思われます(程度の差はあるかもしれませんが)。久し振りに母校に戻ってきた私の目からも、取り巻く条件の変化にもかかわらず、変わった部分よ

りも変わっていないところのほうが多いうように思います。よく挨拶もしますし、掃除も心を込めてやってくれるようになっていますが、部活動や学校行事では、以前と同じように、場合によっては以前以上に活力のある姿を見せてきています。確かに、自立心、独立心という意味では、以前のほうがあったかもしれませんが、それは、生徒達自身の資質というより、今の社会の状況や生活条件から来るものであり、本校だけの傾向ではありません。今の生徒達も、先輩方と同じように、青春時代の真っただ中にあり、悩み、苦しみ、喜び、悲しみ、笑いと涙があります。今年も、多くの生徒が関東の大学に進学いたしますが、同じ血筋を引いたかわいい後輩として、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

最後に、皆様方の今後の益々のご健勝とご活躍を祈念申し上げます、ご挨拶いたします。

明善同窓会 会長ご挨拶

同窓会長 41年卒 真木大樹



明善同窓会関東支部の皆様には、明善同窓会本部にいろいろとご協力、ご指導をいただいておりますこと、心より厚く御礼申し上げます。

さて、母校明善高校は、昨年10月31日、明善校創立130周年を迎え、記念式典を盛大に挙行することが出来ました。明治12年10月1日の中学明善校開校より130年となったのであります。また昨年よりは、生徒の修学旅行において関東支部の皆様のご配慮やご協力をいただいているところがござい、心より感謝申し上げます。

130周年において式典当日の記念講演は、FBS福岡放送の古賀ゆきひと氏(53年卒)の講話「未知の自分を求めて：(電波にのらないちよっとい話)」と題し、ご自身の進学、就職の体験などを入れながら、生徒にとって参考になる有意義な講話でありました。

その他、記念事業として、日本の古典芸術を鑑賞(狂言、歌舞伎)など、生徒たちにとってはすばらしい経験をつむことが出来たと思います。

その他、行在所の整備、記念誌が発行され、130周年の事業が完了致しました。

今年よりは131年目として新たな出発を致すわけですが、昨年までも述べましたように、JRの久留米駅には九州新幹線の久留米駅もほぼ完成に近づいており、

中央連絡通路も4月3日一部開通、6月には全面開通の予定だそうです。35階建てのマンションは3月に完成、その他にもマンションが建ち、大きく変貌を上げています。その他にも久留米大学病院も新たに建て替えが進み、ブリヂストンの久留米工場も新築が進められている状況です。筑後川には江戸風の観光船も浮かび、久留米の街も大きく変化しています。明善高校の校舎の全面改築については、今年3月末、基本設計の予算がつけられ、いよいよ本格的な校舎建設へと進んでいくことと思います。

明善同窓会関東支部の皆様方のご健勝、ご多幸をお祈り申し上げますと共に、さらなるご発展を祈念申し上げます。

第43回明善大同窓会へのお誘い

第43回実行委員長 50年卒 内村直尚



○日時 平成22年10月9日(土) 14時30分開始予定
○場所 創生(久留米市櫛原町)
明善同窓会・関東支部の皆様、こんにちは。本年10月9日に、大同窓会の当番をさせていただきます。す昭和50年卒業(明善50会)の実行委員長、内村直尚です。

伝統ある明善高校の、素晴らしい先輩方がご参集くださる大同窓会の当番という仕事は、真面目に考えると荷が重く卒倒しそうになりますので、そこまで深く思い悩まず、仲間たちとの絆を深めるきっかけ、あるいは、先輩・後輩方との交流を深める縁(よすが)として、できるだけ楽しみながら取り組みたいと思っております。

さて、5年ほど前より明善高校において、昼休みに「お昼寝」の時間を取り入れておられることをご存知でしょうか?部活や受験勉強で睡眠不足に追い込まれがちな生徒さん達に、昼食後の15分程度仮眠をとってもらい、追跡調査をした結果、成績が向上したり、部活でのけがが少なくなったりと驚くべき成果をあげることが証明されました。このことは、国内はもとより、広くアメリカ、ワシントンポストなどにも紹介されており、今や明善は、お昼寝を取り入れて効果を上げている高校の代名詞ともなっているのです。また、多くの研究によって、お昼寝は、睡眠不足の若者たちのためだけでなく、働き盛り、あるいは、高齢の方にとっても心臓病やアルツハイマーの予防、うつ病の予防にも効果があると証明されています。

私たち50会では、明善高校でのお昼寝の実情をご紹介するとともに、先輩方、後輩方の末永きご健康とお幸せを願って、関東にいる50会の仲間たちの強力な協力も受け、私たちの精鋭部隊による最も眠くなる音楽?を聴いていただきながら、効果的なお昼寝の仕方などご紹介したいと思います。

また、私たちが今同窓会という形で、友人や故郷への愛を育む心の原点、風土の象徴として筑後川にスポットをあて、筑後川を時とともに廻り、「五庄屋伝説」などもご紹介

介したいと考えております。

記念品として、明善高校の午睡の取り組みとその成果を詳細にまとめた書籍に加え、最も効果的に仮眠いただけるお昼寝枕をご用意いたしております。

故郷を離れられて久しい関東の先輩・後輩の皆さま方、どうぞ故郷の愛を受け取りに、大同窓会へお運びください。50会一同、心よりお待ちしております。

「明善らしさ」というもの

平成7年卒 古賀 円

先日3月1日に、父・古賀一成の秘書として働く私は、代理で母校の2度目の卒業式に参席しました。卒業以来、何も変わっていない校舎と現役高校生制服姿を眺めると、当時の懐かしい思い出が頭を駆けめぐり、校歌を歌うとタイムスリップしたような不思議な感覚になりました。

昨年の修学旅行では、将来の就職を見据えて東京の企業訪問がメニューとして盛り込まれており、修学旅行も時代のニーズに合わせて変容していく様子を実感した次第です。その中から国会議事堂の見学に来てくれた後輩達から「やはり学歴は大事でしょうか?」という質問があり、多感な学生達は「いい大学へ進学したら、いい企業に就職ができる」という神話が崩れ、将来への不安を肌で感じているんだらうと考えさせられるものがありました。

これだけ価値観が多様化し、モノが充足していても精神的な軸を定めていく世の中で「自分がどこに向かうべきか。何をもちて幸せと呼ぶのか。」という問いは、どの世代にも共通して言えることなのでしょう。可愛い後輩達に何を伝えるべきか、経験不足の私には未だに答えは定まりません。

そんな卒業式で見上げた、「克己・盡力・楽天」という校訓。学生時代には何とも思っていなかったフレーズが今になって目にとまり、改めて校風のおおらかさ、懐の深さをしみじみと感じたのです。いくら己に打ち克ち最大限に力を尽くしても、必ずうまく行くとはいえず、努力が報われないことが多いこの時代に、3つ目の「楽天」という発想こそ大切なのではと再認識させられました。「楽天」とは言うまでもなく「自分の境遇を天の与えたものとして受け入れ、くよくよしないで人生を楽観すること」。自分が望んでいない現実に対して、あるがままを受け入れて前に進む勇氣は「楽天」の精神から生まれ、社会や個人の閉塞感を打破し、ギスギスした人間関係を緩和するにも必要な知恵だと痛感しました。

母校に何となく思いを寄せてしまう愛校心は、同窓会に参加して感じる温かい雰囲気は、この「楽天」の精神から滲み出てくるものであり、知らず知らずのうちに受け継がれた「明善らしさ」なのでしょう。

2度目の卒業式では、大学に進学したり社会に出ていく同窓生にも、高校時代に築いたのびのびとした精神で活躍してほしいと門出にエールを送りつつ、自分自身が明善の卒業生として残すべき精神的な伝統、誇りに気づかされる機会となりました。

四月一日はエイプリル・フルでは、ありません

四月一日は、明善三・一会の例会日です。新宿御苑のサクラの満開時を見込んで、一昨年から四月一日の午後二時半ころから御苑のサクラを十分に愛でたあと、西新宿の会場まで移動します。今年、北は仙台からは藤吉君、西に移ると名古屋の養父君、広島島君、遠くは福岡の毛利さんを含めて総勢三十三名のみなさんが集まりました。



定刻近くなると「取りあえずビール」で始まり、人数が揃った頃合いをみて、合図があつて開会。亡くなった親友の冥福を祈った黙祷からプログラムが始まりました。特に、一月十日の久留米同郷会に出席した五日後に急逝した菅藤君、われわれの還暦記念同期会を久留米から離れた木更津で開催したとき、企画から宿泊の手配等々全てに尽くしてくれたことは忘れられることはないでしょう。

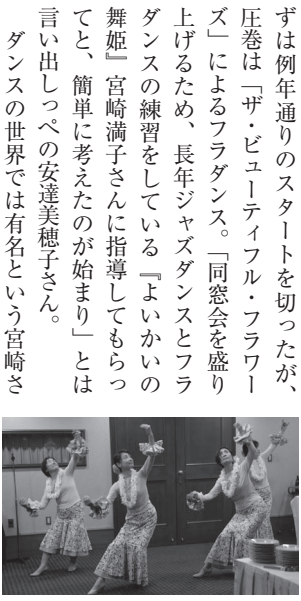
会は、時間が過ぎるにつれ、重ねる杯の数は増え、積もる話は尽きず、全員で「白旗の歌」を高らかに歌うまで進み、関東一本締めで宴を閉じ、再会を約して三々五々新宿の街へ散って行きました。

(昭和31年卒 松平信之)

フラダンスにウクレレ 元氣パワーで圧倒 「よいかい」例会 女性陣が大活躍

まだまだの美貌と若さを誇る女性4人組「ザ・ビューティフル・フラワーズ」による華麗なフラダンス、そしてウクレレ演奏にデュエット。ことしの「よいかい」例会は女性陣の元氣パワーがひときわ目立つ会となった。首都圏に在住する昭和41年卒の同期会「よいかい」。4月8日(木)、東京都心の日比谷公園に面した日本プレスセンター9階の宴会場に福岡や広島、福井などからの遠来組、また「よいかい」を立ち上げた故岩原武司君のご子息も含め34人が集合した。

加藤光彦君と二宮時子さんの新コンビによる司会で、まずは例年通りのスタートを切ったが、庄巻は「ザ・ビューティフル・フラワーズ」によるフラダンス。「同窓会を盛り上げるため、長年ジャズダンスとフラダンスの練習をしている『よいかい』の舞姫」宮崎満子さんに指導してもらって、簡単に考えたのが始まり」とは言い出しつべの安達美穂子さん。



んの踊りの先生に、特別に振り付けを作ってもらい、2月初めからレッスンを始めた。先生指導のレッスンのほか、4人そろうての自主レッスン、さらに各人毎日寝る前にもと猛練習を重ねた。「道を横切ろうと車の流れが切れるのをまわっている間、ちよつと手の振りを練習していたら、タクシィが止まったのには、びつくり」と安達さん。宴もたけなわとなった8時すぎ、宴会場の照明が落とされ、開いた扉から薄い珊瑚色のシャツにロングドレスの衣装を身にまとった4人が姿を現した。男性陣から「ピーピー」と口笛がなり「踊り子さんにはさわらないで」のお決まりのセリフも。一挙に会場は盛り上がった。舞台こそなかったものの、霞ヶ関のビル街の灯りがガラス窓に映える宴会場の中を、4人は「ビヨンド・ザ・リーフ」の調べに乗せて優雅に手を振り、なだらかに足を運び、猛練習の成果を披露した。「踊りも歌も〇〇を越えた人たちは思えぬ・・・10歳は若い」と男性陣。続いて、フラダンスと同様に初めて取り組み、特訓を重ねたウクレレ。「真珠貝の歌」「アロハオエ」の2曲を参加者全員のコーラスで無事に演奏しきった。このウクレレも、フラダンスにはハワイアンソングが付きものと、数ヶ月分の小遣いははたいてみさん購入。急遽ウクレレクラブも結成、特訓に励んだという。「練習も含めて、とても楽しかった」「なんだか若返った気がする」とは舞い終えて、弾き終えての出演者の感想。みんなすっかりウクレレにはまった感あり。次回も乞うご期待!」だそうだ。すっかり圧倒された男性陣だが、最後のメはやはり男性。楠敏美君の発声で校歌、応援歌を合唱。幹事長を松本から原秀一君にバトンタッチし、次回の無事再会を約した。新橋の2次会へ流れていったのはもちろん言うまでもないことだ。



明善高45会ふるさと湯けむりミステリーツアー

2009年9月21日敬老の日、明善高の校門付近に異様な集団がいた。還暦近くとおぼしき白髪や髪の薄いおじさんやおばさん達である。

「克己・尽力・楽天」の石碑の前で満面の笑みをたたえて集合写真を撮っていた。明善高45年卒同期生21名だった。

3月時点での希望者は67名にもぼついていたのだが、冠婚葬祭や介護などの理由で当日はこの数に減ってしまった。この世代の現実だろう。貸切バスに乗り込んですぐに着いたのは、同期生が経営するコンビニ。各自「千円まで!」の飲物やおやつ(つまみ)を、彼と共にビックアップする。

いざ、出発!であるが、「ミステリーツアー」と銘打っている為、幹事の中の二名しか行程を知らない。みな訊きだそうとするが二人の口は固い。バスガイドとドライバーにも協力して貰い、うまくとばけてくれる。

あちこちで「別府じゃなかね?」「うんにゃ、湯布院じゃろ?」などと推理ゲームが始まる。東背振I・Cで高速に上がる時「右じゃろ!」「左ばい!」と無邪気に大騒ぎするのを見れば高校生の団体そのものである。

ただ違うのは、頭は薄く白く、顔には年輪が刻まれ、手には缶ビールを持っていることだ。途中で「ツアーのテーマは、復活です」と告げた。行程は諫早I・Cから島原半島に入り、島原城に登る。普賢岳の火砕流の爪跡を眉山ロードから眺め、島原温泉に宿泊。

懇親会は歌に踊りにコントに自己紹介、部屋に戻って夜更けまで、疾風怒濤の如く続いた。高校時代に全く縁がなかった者同士が、一気に距離が縮まったということもあった。

翌日は長崎市内へ。原爆投下地点・平和公園を見学し、今回の目玉企画の路面電車を一面貸し切り、鉄路の上からゆるゆると長崎を観る。車中でもまた缶ビールで乾杯。最後は大浦天主堂、グラバー園散策という、修学旅行の定番コースである。しかし旅というものは季節と年齢と同伴者が違えば、かなり違うものになるものだ。それに天気。ここは今日も雨だったのは言うまでもない。

さて、テーマの「復活」とは、島原の被災者と長崎の被災者の、奇跡とも言える「街のいのちの復活」の意味で付けた。悲惨・慟哭を乗り越えて観光地として立派に復活した街。諦めなければ再生出来るという見本がふるさと九州に在るといふことは誇らしいことだ。

そして、我々同期生の「縁」の復活。無論、街と我等と較べようとは思っていない。我々には悲劇はなかったが、未来へのささやかな希望が生まれたことは確かなことである。

明善高出身というだけで手放しで語り合えることも多々あること。

例え高校時代に不仲であったとしても、再会から素晴らしい縁が出来ることもあること。「復活」とは、バンドラの箱の底の、決して消えることのない希望なのかも知れない。

今回のツアーをもって大同窓会の実行委員会は解散したが、有志の絆はこれからもつとつと、強く、太く、温かく、そして永くつながっていくことを信じている。

45会ホームページ「ログハウス明善70」のように・・・「明善フォーリアファイ」フォーエヴァー! (昭和45年卒 江口義幸)

還暦・白鳥・思ひこ

「自分探しの旅」。そんな洒落た言葉が無い時代。明善をあとに、我々は上京した。

背中に孤独を貼り付けたまま。東京には、きつと何かがあると思いつつ・・・その何かは、あつたのか無かつたのか。いや、そんな事はどうでもいい。十八にして、そう思った事が重要なのであると今に思っている。その後、人それぞれに人生を歩み四十余年、我々関東明善四三会の仲間還暦を迎えることになった。

今回で、二十二回目の同窓会。ここまで毎年続いたのも幹事の内田君、その両脇をかためてくれた津城・立石君たちによるところが大きい。記念すべき会というので、カッコつけて場所はなんと「鎌倉」。なんとも場所選定が秀逸。鎌倉駅に集合し、一路鶴岡八幡宮へ。お祓いをするという。一同神殿に上がり、正座してこうべを深く垂れる。神主さんの祝詞を聞きながら、そつとあたりを見回す。いずれも神妙な顔。生きてきた六十年に思いを馳せる。ともすればめげそうになった時、あいつも多分おなじように頑張っているはずと気を取り直し、引きずった足をもう一歩を踏み出した事も幾たびか。

そういえば、白鳥の話をしてくれたのも、この中の誰かだった。曰く。「湖に浮かぶ優雅な白鳥も、その下では必死に足をかいているはずよ・・・」。明善たる者、表に出すなという事か。なるほど人生は演技である。白鳥を演じるのも悪くはないかと。

お祓いが終わって外に出ると、皆一様に穏やかな顔。天気もよく、ぶらぶらとそぞろ歩き。江ノ電に乗り、途中下車して、またまた歩く。最後に迎えるバスに乗った。

「食事は何と「鎌倉プリンスホテル」だと言う。「白鳥」にびつたりではないか。「新宿プリ」や「高輪プリ」では駄目なのである。「鎌倉プリンスホテル」こそ我等白鳥によく似合うのだ。落ち着いた語らい、おいしい料理、意地でもワイン。最後は舟木一夫の絶唱でしめくくった。

あつという間の六十年。さてさて、精神年齢は明善時代から進歩したや否や。先はまだ長い。さあ!行こう。我等白鳥に光あれ! (昭和43年卒 平田 幹)



還暦。ついその時。

まだまだ他人事と思っていた「還暦」が、今年ついに私たち69歳の身に訪れてきた。社会において、家庭において、この大きな節目の歳をどう迎えようとしているのか、あるいは迎えているのか。このところの同窓会には、お互いにそれを確かめ合うよい機会でもある。

明善69会関東支部の同窓会名簿には60人弱の名前が載っているが、毎回出席するのはそのほぼ半数程度で、顔ぶれも大体決まってきた。昨年の夏、銀座一丁目の居酒屋に集まったのは26名。そして、暮れの11月末、品川の船宿で開いた忘年会には16名が顔を寄せた。関東支部とは違って、静岡や名古屋在住のメンバーも数人、毎回遠路参加してくれるのがうれしく、毎回みんなで会ってワイワイ話をするのを楽しみにしている。その他にも散策会などと称して年に数回、少人数で一緒に出歩く機会もつくっている。



こんなふうに、やれ同窓会だ、散策会だと、頻りに会っていたら変わり映えがしないんじゃないかと思ったりするが、そんな声は誰からも聞かれない。最近年齢的にお決まりの話題、孫自慢なども出だして話はずまますヒートアップ加減のようだ。

おまけに、同窓会特有の不思議な「集団幻覚作用」とも言うのか、当日会場で顔を合わせた当初は、お互いに顔や体のあちこちに過ぎ去った時を発見したりもするが、それもつかの間。少し思いつき話などしている内、たちまちにしてあの青春時代にトリップしてしまっているから不思議である。(アルコールの力も多分に作用して)目の前の顔、顔、顔がいつのまにか高校生の紅顔に変わっていて、誰々さんは誰々君を好きだったとかいう話になったり、目がなんとなくハート形になっていたり、声が黄色がかったりする。

つい先頃、NHKで「無縁社会」をテーマにしたスペシャル番組が放映され大きな反響を呼んだ。しかし、私たち69会はこの濃密なひとときを共有しながら、これからもそんな心配とは無縁の日々を送って行きたいものである。

(昭和44年卒 田中幸幸)

平成21年の明善46会

今年も明善46会は春の宴会版、秋の旅を企画し実行しました。その中身は、春は国会見学後宴会としました。幹事の私が一度も国会を見学したことが無かったからで、平成七年卒業の古賀円さん(昭和41年卒業古賀一成衆議院議員次女で同氏秘書)にお願いしました。当日一名、久留米から偶然上京してくる者がおり彼を含めて、総勢二十三名の

参加者がありました。ところが、見学中に「修学旅行で来た記憶がある。」と言いだした者が複数居ました。私は修学旅行に参加していましたが、国会内は見えるもの全てが初めてですから当然来たことがありません。結論としては、当時二班に分かれて修学旅行は実施されていきましたので、別の見学コースだったので、別の見学となりました。見学終了後は日枝神社に参拝し、赤坂転石亭での宴会となり、それでも足りないものはカラオケボックスでの三次会となり、十時間近く一緒にあった者もいました。



秋は、企画が少し遅れ、幹事の怠慢もあり、また、イベントの時期でもあったことから参加者が少なく、しかし、女性陣に泊まりは出来ないが参加希望者があり、結局山梨へ日帰り旅行となりました。中央高速道の談合坂サービスエリアで集合し、勝沼へ、大善寺という国宝の薬師堂、厨子や重要文化財の仏像があるお寺で、住職による説明を聞き(まるで日本史の勉強会のように)その後、ローストビーフで有名なレストラン「風」のランチを堪能し、一路日蓮宗本山の身延山久遠時へと向いました。本堂から祖師堂、報恩閣、納骨堂、仏殿と皆繋がっていますので全部拝観しました。その後ロープウェイで山頂の奥の院まで行くかと考えていたのですが、今回の企画でメインは「ほつたらかし温泉」で日の入りを見ようと思っていましたので、時間が無くなり、笛吹市へと急ぎました。最近マスコミで話題の、「このほつたらかし温泉」への興味から、広島県福山市在住の女性が一名参加してました。残念ながら、少し遅れたことと曇っていた為、日の入りは見れませんでした。幹事としては、毎回工夫をしているつもりでも、少々マンネリ化しているのかもと思うことがあります。色々考えています。

(46会幹事 本村龍史)

第8回同志47会同窓会風景から

今年1月10日、久留米で同志47会(どうしよんな)第8回同窓会を開催しました。写真は、その時のフォークダンス風景です。40年ぶりのフォークダンス、あと3人先の憧れのマドンナ(彼)と踊れるか?一楽しみにしていたのに一人手前で終了、なんて人もいたかもしれません。最初は足がもつれそうでしたが、やっている内に思



い出して、結構長くやったのに、おっちゃんどもおぼしやんどんも、少年少女に戻って、いつまでも楽しそうに盛り上がっていました。

関東組も16人参加して、にわか混声合唱団を結成し、「ハレルヤ」、「鉄腕アトム」、「あのすばらしい愛をもう一度」を熱唱しました。「鉄腕アトム」では女子をアトムに扮装させて、みんなでかついで空を飛ばしてみました。歌声に酔いしれた会場から「アンコール!」の声、アンコールは「銀座の恋の物語」、会場の照明を落としてチークタイムをもくろんだのですが、イマイチみんな乗り切れなかったみたいでした。

この同窓会は、会の要だった大坪純一君が暮れに亡くなって、その追悼の会になってしまいました。大坪君は昨年5月すい臓がんを宣告されていましたが、何とかがんばってこの同窓会に出るんだと言っていたのに残念でなりません。彼は明善同窓会の世話役の中心人物の一人として、明善同窓会のホームページも彼が手伝っていました。一昨年は関東の要だった江頭基喜君も亡くなりました。大切な仲間が去るのはとてもつらく悲しいことです。しかし、僕らが生きている限り、彼らと一緒に生き続けていきます。



東京と久留米の合同同窓会

(昭和47年卒 豊島栄三郎)

去年七月の銀座での同窓会は久留米からの同級生を迎えてのものでした。「お盆はいつ帰ってくるかね?」「それにあわせて同窓会やるけんね」...このお返しに八月の久留米の同窓会に出席してきました。場所は同級生が去年、里帰りして開店した餃子の店「湖月」です。二十人が集まりました。カラオケの二次会を終えた頃には完全なる酔っ払いです。同級生の奥様が車で迎えに来てくれました。そのまま同級生と後部座席でくっつきながら久留米の私の実家まで送ってもらいました。「お前ん家は懐しかね」同級生の言葉です。私の家はたまり場でした。彼は同級生で旧友ですが級友ではありません。西国分、諏訪、明善、そういや一度も一緒のクラスになったことがありません。小学校は百六十人、中学、高校は四百人の同窓生がいるのですから、あり得ること、笑ってしまいます。でも「よう遊んだね」...懐か気持ちでいっぱいです。十月は久留米の大同窓会に東京から四名が「銀座の夏」

のノリで参加しました。掲載する写真はその時のものです。二次会の同窓会は二十名、いっぱい集まりました。三次会は隠れ家みたいなお店、鮎川誠さん、シーナさんがいらっしやいました。厚かましいお願いでしたが五十二卒を交えて記念写真を撮らせてもらいました。



四次会はカラオケです。もうこの頃は男三人でした。ドアを開けると四十九卒の先輩たちがいらっしやる。「えつ」とお互い顔を見合わせました。びっくりです。「幹事、ご苦労さまでした」ほんとありがとうございます。行きつくところ五次会は締め屋台ラーメンです。夜中の三時過ぎなのに列ができています。「ほんと、久留米のラーメンはうまかあ」ですね。

この十月の大同窓会の日五年前に開催した東京デイズニールランド同窓会を今度は久留米と東京の合同同窓会としてやることに決まりました。ひさびさの「大型企画」「ハコモロ企画」です。年明けて四月二日は実行委員会という名目の飲み会をやりました。事前に携帯メールでアジェンダを送っていましたので二十分で実行委員会の話は終わり、後は酒飲みです。

四月十七日は、一年七組の同窓会が福岡のソラリアで開催されました。担任の横山先生を囲んでの同窓会です。私は仕事で都合つかず欠席でしたが、昼の二時に携帯メールが届きました。横山先生の写真です。「盛り上がってます」昼の十二時に始まり夜の七時半の三次会でお開きになったようです。

五十二卒は五月二十九日の東京デイズニールランド同窓会で盛り上がっています。若いもんには負けませんよ。昼間はデイズニールランドのアトラクションで童心に帰ります。夜は夕食料理に舌鼓し、ワインで酔っ払いまくります。五年前のことを思い出します。「太股のことをモモドと言わん?」明善女子の言葉です。馬鹿うけでした。でも確かにあれは「ちっこ弁」です。正しい言葉です。

今年の五月、あの時の盛り上がり再現されるでしょう。(昭和52年卒 池田和也)

今年の総会担当は私達で頑張ります

ホームに降り立つと、ゴムを加工するあの独特の臭いが漂う。東京都小平市の西武国分寺線小川駅。すぐ東側にブリヂストン東京工場がある。商店街の久留米ラーメン「いし」に入ると、店を経営して30年以上になる石橋和明さん(62)「久留米が「どげんしょんね」と気さくに話しかけてくる。この街にはJR久留米駅のクジャクこいさないが、たまに気が向くと足を運び、ラーメンをすすりながら「故郷」を思う。今まで、そんなのんきな日常を過ごしてきた。

関東支部総会幹事の知らせが舞い込んだのは今年2月。「や」と連絡が取れたあ、よかつた。大塚(旧姓・和田)由美さんが、携帯電話の向うで息を弾ませていた。同級生を集めるため必死に探したという。毎年1回都内でも総会が開かれ、今年の幹事がS57年卒であることや月1回の定例幹事会で進捗状況を報告していることを知らされた。初めて耳にする内容ばかりで、久しぶりに聞く大塚さんの声から、何となく事態の重さを飲み込めた。

集まった関東在住の同級生は、中村誠慈君を代表に、大塚さんのほか中川原伸章、小陳勇一、広澤(旧姓・恩田)康代さんら12人。昨秋に本格的な準備に着手し、広澤さんが経営する乃木坂のエステサロン「プライムビューティーラボ」などに集まっては、総会に必要な項目や課題の一つ一つに丹念に向き合った。来賓への出欠確認や挨拶は誰にしてもらうのか▽誰が会場の下見に行くのか……。これらをメンバーに振り分けて、実行に移すのは、なかなか容易でない。案内状にいたっては差し出す相手によって4種類以上あり、煩雑さを極めた。日頃のメールのやり取りも、どこまで意思疎通ができていたのか心もとない。最大の難関とも言える講演会の講師は、幹事団メンバーでもある大塚製薬常務執行役員のイネステラー(旧姓・笠)章子さんが早い段階で快諾してくれた。これでちよつとは楽観ムードに浸りたいところだが、現実には、そう甘くはなさそう。とは言っても、定例幹事会でアドバイスをいただいたながら、7月に向けて着実に前進している。果たして、私たちはどんな総会をお見せできるのだろうか。不安は尽きないが、大きな楽しみでもある。

(昭和57年卒 小出楨樹)

第2回 明善 VS 秋田高校 野球部OB親善大会 観戦記

11月29日(日)天気予報は芳しくなかったが、両校選手の熱気で薄日がさす絶好の野球日和の下、文京区弥生の東大野球場において、第2回目の親善試合が行われた。

明善24名、秋田10名の選手が集い、秋田高校神崎大先輩(S25卒)の始球式の後、明善の先攻でプレーボールとなった。なお、今回は明善野球部マネージャーであった田嶋ひとみ(日3卒)美人ウグイス嬢による場内アナウンスがあり、両校に大好評であった。

明善1回表、二死一、三塁のチャンスを逃すと、その裏、

秋田は二死満塁で二塁手のエラーにより先取点を上げると、この回5安打など打者一巡の猛攻により5点を先行した。さらに4回裏、二死一塁から六番石井(S56卒)の二塁打により1点の追加点を上げた。

一方明善は7回表、八番友池哲雄(S51卒)の三塁内野安打を足がかりに、一番渡辺義孝(H4卒)の左中間を破る二塁打で初得点を上げた。9回表では、先頭打者七番久保田要(S62卒)がレフトオーバーのあわやホームランという二塁打を打ちチャンスをつかんだが、秋田高校甲子園出場投手佐藤ウキ(H16卒)に後続を断たれ、1-6Xでゲームセットとなり、昨年に続き明善の敗戦となった。13時5分に終了し1時間51分のお試合であった。特に目立った選手は、甲子園春夏出場した秋田高校笹山(H7卒)の4打数3安打の活躍と我等が白球王子・草場正登(S37卒)の2回から5回にかけての4イニングを打者18人相手に、被安打5、四球3、奪三振2、失点1、投球数71の熱投による大健闘であった。

更に特筆すべきは、最年長出場者では、昭和26年に旧制明善中学卒業の本村政治大先輩(77才)が6回に代打で出場され結果はフルスイングの三振であったが、両軍ベンチは拍手喝采で大いに盛り上がった。

本村先輩は、早稲田大学野球部での活躍後、現在は早稲田大学野球部OB会(稲門会)の会長をされており、この親善大会を実行するにあたり大変ご尽力いただいた方であり



秋田高校と明善の選手たちが握手を交わしている様子。



2009.11.29. 第2回秋明交流戦 於:東大球場

第2回明善同窓会関東支部ゴルフ大会

秋晴れの絶好のゴルフ日和に恵まれた平成21年11月14日、明善高校130周年を記念して、第2回明善同窓会関東支部ゴルフ大会が、茨城県ワイルドダックカントリークラブで開催された。参加メンバーは、下記のとおり、7組27名であった(敬称略)。

- 記 O U T
1組 諫山俊信(33) 牛島爽(33) 廣瀬雅彦(33)、田中龍夫(33)
2組 井手秀明(60) 田中孝典(60) 尋木浩司(61) 尋木梓(二)
3組 別府秀喜(41) 中村武(41) 古賀啓子(41) 山下政晴(43)
4組 原寛(55) 本田匡史(55) 伊東美晃(55)
I N
1組 小川卓三(43) 津城俊幸(43) 山口光夫(43)
2組 間地達雄(43)
2組 瀬戸渡(44) 嶋田哲(44) 岡崎ヒサ子(44) 山口裕三(55)
3組 植橋明浩(50) 内田直人(51) 豊福和弘(54) 持松明弘(55)

上は33年卒から下は61年卒まで幅広い年齢層のプレイヤーが参加し、大変活況のコンペとなった。当日は、大半の参加者が朝の6時過ぎに東京駅八重洲口に集合し、バスでゴルフ場へ移動したが、バスの中でも面白い話に花が咲き、年次を越えて明善高校の絆が深まったようであった。コンペでは、若手の拙劣なショットを尻目に大先輩方が見事なショットを繰り出し、実力と経験の差を見せつける格好となった。結果は、はるばる久留米から参戦された43年卒の間地達雄先輩が見事優勝され、優勝賞品であるプリジストンの高級ドライバーを手に入れた。今回もプリジストンスポーツの50年卒植橋明浩先輩より、優勝賞品のドライバーをはじめとして数多くの賞品を提供して頂き、表彰式も大変盛り上がった。アルコールが入った帰りのバスも大変に盛り上がった。アルコールが入った帰りのバスも大変に盛り上がった。アルコールが入った帰りのバスも大変に盛り上がった。

次回第3回コンペは、平成22年5月29日に予定されているが、女性や若手の方を含め、もっともっと数多くの方に参加して頂き、益々このコンペが盛り上がることを期待している。(昭和61年卒 尋木浩司)

定時制通信制陸上競技大会の応援にて

8月15日の朝、定時制陸上部が「全国高等学校定時制通信制陸上競技大会」の福岡県選手団(41名)の一員として出場していることがネットで確認できたので、最終日の16日、国立競技場へ応援に行つて参りました。去年、私が行った日は小雨模様で寒さに震える天候でしたが、今年は残暑厳しい中で競技となりました。明善生徒は4年生3名、1年生2名の合わせて5名がエントリー。2000m(根本君(1)、800m(初瀬君(4))、1500m(藤野君(1))、400mハードル、4x400m(リレー)、走高跳(平君(4))、3000m障害(高木君(4))に出場し、3000m障害では入賞こそ逃したものの、決勝進出も果たしました。前述のとおり、当日は厳しい暑さの中での競技でしたが、メインスタンドの日陰に「避難」しながらの観戦となりましたが、明善生徒が出場するときは最前列まで移動して声援。選手たちも声援に励んで、自己記録の更新など、持てる力を十分発揮してくれました。練習環境など必ずしも恵まれている訳ではないと思いますが、選手たちの日頃の頑張りや敬意を表したいと思います。

その後、卒業前に顧問の連尾先生からお手紙をいただき、「4年生の3名は無事卒業し、他の生徒は今年も是非全国大会出場を」と意気込んでいる」とのこと。卒業した生徒の今後の活躍を期待するとともに、下級生には今年も福岡選手団入りを目指したいところです。尚、陸連の競技カレンダーによると、今年も8月14日(16日の予定で開催される)です。去年は学校から連絡がなかったのが明善生徒の出場有無が判らず支部として対応できませんでした。今年も顧問の先生から早めに連絡を頂けるとのことです。多くの卒業生の応援を呼びかけたいと思います。(昭和54年卒 雨森)



福岡県選手団のメンバーたち。

編集後記

今回も先輩方の色々なイベントを紹介でき、同窓生たち同士の絆を深める様子を垣間見ることができた。ミステリー旅行、フラダンスにフォークダンスなど同級生同士であるからこそ、童心に返りいっそう楽しめたことと想像する。読者は人生の午後を迎えた方々が多いはず、私自身も旧友たちとの再会や絆をさらに深め、エンジョイすることで夕暮れがいつまでも来ないことを願つてやまない。(昭和51年卒 内田)